

研究だより

青森市沖館 林業試験場青森支場

編集人 木村武雄

御挨拶の言葉

支場長 西村太郎

夏場にしての御挨拶が大變遅れたことを御詫
び申上ます。

營林局の經營部長が支場長を兼務する目下の形
態は勿論過渡的なものでありますが、局署と支場
との親和と云う面では、確にプラスされると思わ
れ、又プラスさせる可きだと云う風に考へて居り
ます。このことは單に個人的な繋がりの方だけで
なく、試験場の仕事を、國有林事業に迅速に反映
させる、又第一線に働く人々の疑問を、直ちに試
験場の研究の對象に持ち込み得ると云つた面を寧ろ
重視し度い氣持であります。

林業技術振興策を云々する時、試験結果の普及
の問題が常に取り擧げられて居ることは御承知の
通りであつて、林業試験そのものの性質が簡単に
表明し得るものでないことが、普及と云う仕事
を阻害して居るであろうことも容易に想像され
る所であります。併し普及に自信がないとして、
所謂象牙の塔に立ち籠つて、只管己の好む研究に
打ち込んで居られては、試験場員と云うものの存
在價值が疑われる次第で、若し研究成果の普及が
思わしくないと言われるなら、此の邊に問題があ
るのではないかと思考する次第であります。勿論
林野廳に研究普及課の組織があるからには、研究
員自らの普及活動を云々する必要はないと思われ
ますが、如何なる研究が、如何なる意圖の下に、
如何に繼續せられて居るかを、普及課に判然せし
め、その普及活動の資料を提供することが試験場
員に課せられた使命ではないかと云う点を問題に
し度いのであります。

私は此の様な見地から、支場員に對する就任の
挨拶の際、研究に對する予定計畫の忠實な實行と
その發表に對する考慮を促したのであります。そ
れと同時に研究の對象が、第一線の要求と合致す
ることが望ましく、營林局署の側からも、研究に
就いての遠慮のない批判と、題材の提供を戴き、

國有林と支場との仕事上の聯携を保ちたいと考へ
ますので、此の機會に局署の方々に對し、御協力
を切にお願い致す次第であります。

先般大政本場長が御來青の際、色々お話を伺つ
た際にも、場長の方針が、統一ある研究題目の選
擇に歸一する様に諒解され、私の考へ方と多分に
一致したと云う感銘を受けた次第で、些か意を強
うした譯であります。例へば、研究者の好む題目
にのみ深く進むと云う様な態度は、大學の研究室
に相應しく、少くとも林業試験場員に對しては許
されないだろうとお話など、端的に今後の我々の
在り方を示唆しているものと考へるのであります。
其處には多分に應用技術の、しかも同一目的
に對する協同研究と云う面が強調されることが想
像され、之には勿論異論もありませうが、原則と
して左様あるべきだとの主張を御理解願ひ度いと
考へます。斯くして普及との關聯が可能となり、
試験場は科學と技術との媒介体であるとするその
性格が明確になると信するものであります。

現在研究されて居る題目が、この見地から間違
つて居ると、申し上げているのではなく、逆に此
の様な考へ方に沿つた研究がなされて居ることを
信じて居ります。只普及との關聯に於て、一步前
進の必要があるのではないかとの意味で、我々の
立場の再確認を試みたに過ぎません。研究と云う
ものが、その種類が如何様にもあれ、欲得を離れ
た自然に發する研究心に支へられた精進に培われ
るものと考へる私は、就任以來數ヶ月、僅かに見
聞した範圍に於てさへ、之を實證する幾つかの場
面を経験し、深い敬意と感謝の念に打たれたので
あります。支場長として非力ながらも、支場員各
位の熱誠に應へねばならぬとの決意を深くしてい
ることを卒直に表明致し度いと思ひます。

又我々の研究が自然現象を相手にする点で、人
手を要することが多く、思わざる御迷惑を關係各
位にお掛けしていることも充分想像される所であ
ります。最近も赤松人工林と薪炭林の成長並に植
生調査と云う面倒な調査を各署にお願い致したこ
とも、我々一同恐縮に堪へません。地被植物に依
る地位の判定と收穫予想を對象としていることを
御理解願ひ、その成果に期待せられて、御諒恕を
乞ふ次第であります。

以上取り止めないことを申上しましたが、局署と
支場とをつなぎ、反省の場としているこの「研究
だより」紙上を借り、一言御挨拶と御禮を述べた
次第であります。

戸來村村有林

造林適地調査報告書

青森支場 村井三郎

I. 緒言

三戸營林署長を通じて戸來村長より、當支場長宛、標題の件について依頼があつたので、昭和27年5月25日より同月28日迄往復共4日間、現地に於て調査したからその概要を報告するものである。

現地調査に當つて案内と説明の勞をとられた戸來村の工藤芳男氏及び戸來擔當區の山館高氏に深謝すると共に、機會を與えられた林試青森支場長戸來村長及び三戸營林署長に對し謝意を表するものである。

II. 調査地の概況

調査地は二團地からなつて居る。北團地は戸來村大字北川目に屬し、軍馬補充部三本木支部の出張所が終戦後に解体して、開拓地以外が本村有林となつたものであり、其の大部分は南向緩斜地を

なしている。南團地は同村大字南川目に屬し、梅田牧場から買収されたものであり、主なる澤3本は東流するけれども方向複雑な團地である。

兩團地共に從來放牧がなされたため所々にシバクサ原を生じ且林内の殆ど全部はかつての牛馬侵入を受けた形跡が歴然としている。

尙此等兩團地に對する村當局の意向としては「村有林は將來有用針葉樹に改植したいが、どの程度實行可能であるか實地の調査を願ひ度い」と云うにある。

III. 調査地の植物群落及び其の取扱

兩團地を合すれば、6ヶの植物群落が認められる。まず森林としての乾性のものではアカマツ林とナラ林があり、中性のものにはブナ・イタヤ・ミズキ林とヤマハンノキ林が屬し、濕性のものにはトチ・サウグルミ林がある。

草原ではシバクサ原のみで、他は森林の下生として若干のものが存するのみ。此等の分布状態は植生分布圖に明かである。

A. アカマツ林……南團地の一部に人工植栽林がある。海拔高は250米から400米に亘るけれども青森縣南東部の天然林をみれば、海拔高200米が限界の様であり、該所は海拔高の面からすれば無理である。別にアカマツは乾性の土壤に生ずることが多いが、此の面では現地在が小尾根部で南斜面であるから適することとなる。本調査地では全般的に300米以上の所が多いから今後アカマツの増殖を計ることは無理であるが、既存のものは保育間伐を施行してなるべく良い材を收穫する様に努力すべきである。

B. ナラ林……放牧と人為伐採が繰返された林地であり、ミズナラとコナラとが混生して居る。兩團地林共に西向斜面若しくは南斜面に多く現われて居る。本林は地形的にも乾性の場所が多く、又ナラ自身として乾燥地には此の地方でアカマツ以外に適しないが前述の通りアカマツは無理であるから、將來共

戸來村
村有林
植生分布圖(五万分一)
地形圖による

A	アカマツ林	現地の 施置
B	ナラ林	
C	シバクサ原	アカマツ 造林適地
D	フナ・イタヤ ミズキ林	
E	ヤマハンノキ林	ブナ・イタヤ 造林適地
F	トチ・サウグルミ林	
G	トチ・サウグルミ林	ブナ・イタヤ 造林適地
	トチ・サウグルミ林	

研究だより

にナラ林として當地方名産たる木炭原木林とし薪炭林作業をとつて施業するのが得策と考えられる林である。

C. シバクサ原……一般にシバクサ原は乾性と解されるけれども、現實にはそんな單純なものではない。シバクサ原の成因は土壤を調べると表土が極めて堅く酸性が一般に強い様であるから開放地に牛馬放牧が數年間繼續され、土壤が堅くなれば出現する様であり、乾性地、中性地共に現われるものと見てゐる。

此所に造林せんとすれば堅い土壤でも差支えない樹種を選ばねばならない。幸にして岩手山北麓のシバクサ原に明治末期にカラマツを造林して大成功を治めた記録を先輩が残して呉れたから、シバクサ原はカラマツ造林地とすることが出来る。

D. ブナ・イタヤ・ミズキ林……此の林は中性乃至濕性に生ずるものであり、木の種類も雑多なものを多く含むものである。造林樹種は場所により異なる。濕性地はスギを造林して良い所であり、中性地はカラマツを造林して良い所である。但し現地に於て夫等は決定されるべきであるから大勢としては本林はカラマツの適地として置くのが無難である。

E. ヤマハンノキ林……北園地の本林は丈の高い草本の間にヤマハンノキが散生する林況を呈している。ヤマハンノキは荒地にも生ずることがあるが、該所では大形な草本を有するから土地は悪くないと見るべきであり、ヤマハンノキを放置して草本の刈拂をなしカラマツを植栽すれば良好な成績が期待出来ると思われる。南園地の本林はヤマハンノキの老木にケヤキ、ミズキ、イタヤ等を混じて前記ブナ・イタヤ・ミズキ林に類似して居り、此所はスギの適地と考えられるけれども無難な處は矢張カラマツとすべきであろう。

F. G. トチ・サワグルミ林……濕性地を好むもので主として澤通り地帯に現われる。植生分布圖には土壤の深い場所を造林適地とし、浅い岩盤の出易い所を造林不適地として夫々區別して置いた。何故ならばスギは本林の水濕程度を最適とするから何所でも良い様なものであるが、將來の良好な成林には土壤の深いことが必須條件であるからである。まず本林をスギの適地と見做して置く。

Ⅳ. 植栽樹種の決定及び實上の注意

植栽樹種の決定には、まず地味の判定を地表植物の種類により決定したので次の通り結論する。

1. アカマツは前述の通り、本調査地の海拔高は無理であるから増殖すべきではないが、現存林分は保育に努めるべきである。

2. カラマツは從來スギの適しない所はカラマツにすべきだと云われた程、何所でも良い様に解されたが、本州中部地方の天然林の調査が進み、カラマツは濕性に適することが明らかにされたが、既往の成績で中性地でも良い成長をするから本調査地の大部分がカラマツに適することを明らかにした。

3. スギは濕性地で地味の良好な所に植栽されるべきものである。勿論過濕地は不適であり、中性地に植えれば收穫時に金員収入が僅少であるから止むべきである。本調査地では小澤の奥部の濕性に適地が多く、濕性地でも土地の浅い所には植栽すべきでない。但し傾斜度には無関係である。

4. ヒバは青森縣の兩半島で有名であり、本調査區でも差支はないが、ヒバは下木植栽に適するに拘らずかつての放牧地で適當な疎開林分が見付からぬこと及び、ヒバは少くとも百年以上経なければ目通り一尺の材を期待出来ないから民間には不得策であると信じたので造林樹種として採り上げないこととした。

實行に當つての注意としては次の如きものがある。

1. 既往のアカマツ、スギ造林地は間伐を必要として居るから速急にB種間伐を行つて收穫時の金員収入を大ならしめるべきである。

2. DとF及びEの南園地に造林せんとする場合は潔癖な皆伐をなして植栽し、數年間刈拂を繼續實行すべきである。

3. Bのナラ林は永く存続すべきことは前述の通りであるが、從來地元で行われて來た皆伐薪炭林とするよりは手數がかかるけれども集約で金員収入の保続する擇伐薪炭林作業とした方が進歩した取扱である。

(以上)

研究だより

★ 情 報 欄

日本林学会東北支部大会

第四回本大会は下記の次第により開催された。

期日……昭和27年8月21日～23日

場所……山形大学農学部(鶴岡市新屋敷町)

- 21日 午前 1. 日本林学会東北支部理事会
2. 日本林学会東北支部総会
3. 特別講演(「林学経営研究の方向」
林試経営部長 小幡 進)
- 午後 1. 会員研究発表
2. 会員懇親会
- 22日 午前 1. 会員研究発表
午後 1. 同上
2. 薪炭林牧野研究会
- 23日 現地視察
A. 市内工場
B. 海岸砂防
C. 羽黒山

以上会員研究発表のうち青森営林局署及当支分場員関係のものは次の通りである。

- 化学肥料と苗木の枯損 第一報 支場 神 潔
○森林所有関係の基礎構造と林野整備の諸問題
沼宮内署 佐藤 彦治
○枯損に関する研究 第一報 品種別の形態について
好摩分場 宮崎 楠 千葉 春美 村山 英雄
○基準本数を根拠とする間伐の一方法
局計画課 山内 秀規
○苗畑土壌水分の季節的变化に就いて
好摩分場 宮崎 楠 佐藤 亨

以上の外各講演者の研究題目は次の如くである。

- 繊維素物質の結晶領域に関する化学的研究(第六報)
蒸解並に漂白条件がスギのクラフトパルプの微細構造に及ぼす影響(山大農学部 谷口栄一) ○仙台市に発見された銀杏の間伐樹について(附)銀杏樹の諸形質と林業上より見たる価値性について(宮城農業短大 太田 哲) ○スキー試作について(岩手県林試 高橋達) ○アイオン颱風による早池峯山の崩壊と治山(第二報)岳川及猿ヶ石川方面に就いて(岩大農学部 武田進平) ○山形県置賜地方における北米産樹種の生育について(山形県林務課 斎藤謙) ○「半白炭」

- 製造法特に操作要領について(秋田県林務課 佐藤克三) ○コナラの生長量(林試釜淵分場 船山良雄) ○スギ天然林皆伐跡地に棲息する真正蝨類繁殖の趨勢について(扇田署 佐々木秀吉) ○統計的品质管理図法の應用(鷹巣署 越中貞藏) ○ウルシの萌芽状況について 第一報(岩手県林試 高野徳明) ○南部藩林政における二、三の問題について(岩大農学部 佐藤三朗) ○畜力並に機動力利用による苗畑経営技術の改善に関する研究 第一報(岩手県林試 横山八郎) ○同上 第二報(岩手六原農場 猪股勤) ○林道樑桁断面算出表について(秋田県林務部 阿部今朝雄) ○林業地代の前提(国富論を主として)(山大農学部 沢田和博) ○生松肪採取について(岩手林試 佐々木治朗) ○榮養別によるスギ苗の炭水化物集積に就いて(豫報)(山大農学部 須藤昭二) ○カラマツの挿木(林試釜淵分場 塩田勇) ○立て立て伐りについて(福島県林務部 遠藤久) ○植付作業の工程分析(鷹巣署 三沢勝男) ○スギ種子に附着又は潜在する病原菌(第一報)(林試秋田支場 佐藤邦彦、太田昇) ○青森営林局管内各地産ヒバ材の材質(第一報)(岩大農学部 松本島) ○アカマツの人工下種について(本荘署 伊藤陳重) ○ブナ立木の防腐について(釜河江署 三宅豊) ○カタビロトゲの傳播(林試釜淵分場 余部昌資) ○鳥海山麓ブナ天然林の構成並に成長に就いて(阿仁合署 鈴木清吉) ○沢伐薪炭林土壌の一例 豫報(岩手大学、岩手県署 千葉宗男、白根繁) ○小坂鉱山煙害地の崩壊侵蝕に就いて(林試秋田支場 佐々木信行、伊藤幸雄) ○キリまき付苗の養成に就いて(鶴岡署 栗田章) ○ブナ稚樹の生長に就いて(矢島署 三国善吉) ○トドマツの生育と温度(林試釜淵分場 四手井綱英) ○植栽適期調査(釜河江署 水田富雄) ○桃洞杉の造林に就いて(阿仁合署 西 健) ○トモロコシパルプに就いて(岩手大学農学部 吉田榮一) ○山形大学農学部森林工学研究室新設風洞について(山大農学部 末 勝海) ○冠雪の害(林試釜淵分場 高橋敏男) ○スギ種子の芽出について(米沢署 浅間茂慶) ○スギ天然木の立木利用率に就いて(林試秋田支場 秋保真樹) ○素材生産事業の損益計算と分析(鷹巣署 高坂敏雄) ○カタビロトゲの生態について(山形県署 川田庄一、石垣和夫) ○大蔵地に移動量観測報告(山大農学部 金内英司) ○木材需給並に價格の変動(山大農学部 佐藤元宏)